

赤いガラスの宮殿

小川未明

青空文庫

ひとり
独りものの平三は、正直な人間でありましたが、働き
がなく、それに、いたつて無欲でありましたから、世間の人々
からは、あほうものに見られていました。

「あれは、あほうだ。」と、いわれると、それをうち消すもの
ないかぎり、いつしか、そのものは、まったくあほうものにされ
てしまえばかりでなく、当人も、自分で自分をあほうと思ひこ
んでしまふようになるものです。平三も、その一人でありまし
た。

夏のはじめのころであります。

往來を歩いていると、日ごろ、顔を知っている、村に住む若

かふうふ
夫婦が旅たびしたくをしてきかかるとに出であいました。男おとこは、なにか大きな荷おおを背負せおっています。後あとから、やさしい若い女わか房にようぼうが、手てぬぐいを頭あたまにかぶつて、わらじをはいてついてきました。

「どこへいくんだな。」と、平三へいぞうは、びつくりした顔かおをしてたずねました。

「旅たびへ出でかけるだよ。この村むらにいたつていいことはない。旅たびへいつてうんと働はたらいてくるだ。平へいさんも、いかないか。」

「いつ、この村むらへ帰かえるだ。」

「それは、わからない。」

「旅たびつて、どこだな。そこへさえいけばどんないいことがあるけい。」

「それは、広いだ。どこつて、おちつく先は、わからないが、たんといいことがあると聞いているから出かけるだよ。」

「その広い土地を掘ったら、金か、銀でも出てくるか……。そんなら、おれもいって、精を出して掘るべい。」

「金も、銀も、なんでも出てくるだ。おれたちがいつて、よかつたら、たよりをするだよ。そうしたら、おまえも、出かけてきべい。そんだら、達者で暮らしなよ。」

「そんだら、二人も、道中気をつけていきなよ。」

平三は、いつまでも道の上に立って、二人の姿の消えてゆくのを見送っていました。

それから、日がたちました。

彼は、村はずれの丘のふもとで、ひなたぼっこをして、ぼんやりと空想にふけていました。おりおり思い出したように、初夏の風が、ため息をつくように吹いて、彼のほおをなでて過ぎました。

そのとき、三十五、六の女が、頭髪を乱して、ぶつぶつとつぶやきながら、せわしそうな足どりで、なにかざるにに入れて、小わきに抱えながら、平三の前を通り過ぎようとしていました。

平三の腰を下ろしているうしろには、こんもりとした野ばらのやぶがあつて、真っ白な花のさかりでした。それには、無数のみつばちが集まっています。しかし、そんなことには、ここを通りかかる女も、また平三すらも気づいていないようでした。

かれは足音を聞いて、ふと顔を上げると、やはり見知りの村の女でしたから、

「こんにちは、どこへいかつしやる……。」と、声をかけました。女は、びつくりして、こちらを向きしました。その目の中は涙にぬれていたのです。

「かわいい、大事な坊やが死んでしまつて、おもちゃがあると思いで出していけないから、みんな河に流してしまおうと思つて、捨ててにいくところだよ。」

「ほんとうに、かわいそうなことをしたな。おれに、よく悪口をいったり、石を投げたり、からかったが、あの子は、かわいい、いい子だった。おれ、ちつとも憎いと思つたことがなかつたよ。」

「ほんに、おまえさんに、よくいたずらしたつけが、後生ごしやうだから、悪くわる思おもつて、くんなさんなよ。ちつとも悪気わるきはなかつたのだから……。」と、母親ははおやは、思おもい出だして新あたしく出でる涙なみだをぬぐいませした。

「おれ、坊ぼうやのおもちやもらつておくだ。坊ぼうやのと思おもつて、大事だいじにするだ。おくんなせい。」

「そんだら、河かわ流ながさんで、おまえさんにくれべいかな。」

母ははおや親おやは、子こ供どものおもちやを平へい三ぞうに与あたえたのであります。

彼かれは、それそれを自じ分ぶんの小屋こやへ持もつて帰かえつた。それらのおもちやは、

びつこの女おんなの子このお人にんぎ形ようや、セルロイド製せいのサンタクロース

に似にたおじいさんや、馬うまや、こわれかかつた汽き車しゃや、そのほか絵え

ほん
本などでありました。平三は、壁のきわにそれをならべて、死
んだ子供の顔を思い出していたのであります。

村の子供たちは、平三の留守の間に、小屋の中へ入つてきま
した。そして、彼が大事にしているおもちゃを外へ持ち出して、
いつのまにか、どこへかなくしてしまつたのもありました。

「また、いたずら子が、留守にはいつて、大事にしているおもち
やをどこかへ持ち出してしまつたな。」と、帰つてきた平三は、
ひとりでどなり声を出して、家の外へ出て、どこかに落ちていな
いかとおもちやをさがしました。

もはや、夕闇は、路の上にせまつてきて、あたりのものが、
はつきりとわかりません。彼は悲しくなつて、おもちゃを持つて

いた、死しんだ坊ぼうやにすまないことをしたような気がして、涙なみだぐみました。が、また考かんえてみると、同おなじような子こどもが、どこかへ持もつていって遊あそんだのなら、けっして、罪つみにもならないと思おもつたりしたのです。

木この葉はの落おちる秋あきとなり、そして、やがて冬ふゆがきました。

雪ゆきは、ちらちらと降ふりはじめました。田たや畠はたけに、餌えさがなくなると、からすは、ひもじいとみえて、カアカア鳴ないて、人家じんかのある方ほうへ飛とんできました。

「こんな雪ゆきの日ひには、困こまるのは、だれも同おなじこつた。そら、おまえにもくれてやろう。」と、平へい三ぞうは自じ分ぶんの食しょく物もつをわけて、からすに投なげてやりました。

からすという鳥は、黒い陰気な鳥で、人間にはきらわれますが、なかなかりこうな鳥でした。さかしそうな目つきをして、木の枝にとまって、平三の方を見ましたが、じきに飛んできて、それを食べました。それから後は、いつでも平三の小屋の近くにおいて、遠くへいっても、また、このあたりの木に帰ってききました。

雪のないうちは、手助けにやとわれたりして、どうにか暮らしてゆきましたが、雪が降ってからは、外の仕事もなくなっていました。平三をやとうようなものもなかったのです。

「平三は、どうしたろうな。」

「せんだって、往來を通っていたら、からすが屋根にとまって、

アホウ、アホウと鳴ないていたぞ。」と、戯じやうだん談だんをいったものがあります。

「無む欲よくな、正しやう直じきな人間にんげんだ。そんな悪わる口くちをいうもんでねえ。雪ゆきが降ふって、仕事しごとがなくなつて困こまっているだろうから、私わたしは、明日あすにも、ちよつといつてのぞいてみるつもりだ。みんなも、なかよけいなものがあつたら、くれてやるがいいだ。」と、老ろう人じんが、口くちをいれました。

こんなに、かげで、村むらの人ひとから同どう情じやうされているとも知らずに、平へい三ぞうは小こ屋やの中なかで、一ひとり人で雪ゆきぐつをつくっていました。

「カア、カア。」と、からすが、外そとのかきえだの枝えだにとまつて、しきりに鳴ないています。

「なにかくれてやりたいが、今夜は、ひとつの飯もねえだ。我慢をしろよ。このくつを持って、明日は、早く売りにいつてくる。そして、帰りに食べるものを買つてくるからな。」と、小屋の中で、聞こえるはずもないのに、からすにはなしをしていました。ちようど、そのころのことです。ほどへだたつた町の酒屋に、嫁入りがありました。その評判は、この村でもたいしたものでありました。

「三国一の嫁御というこつた。あんな器量よしは、まあ、金のわらじをはいて、さがしても、ほかには二人とないという話だ。」
 こんなうわさは、端から、端にまでひろまりました。平三はそれを聞くと、

「どんな、嫁御よめごだろうな。」と行って、ぼんやりと考えこんだのです。

村むらで、町まちへ行って、その嫁御よめごを見てきたものは、帰かえると、その美しいことを、ほこり顔がおに語かたつたのでありました。平三へいぞうは自分じぶんも、どうかして、その嫁御よめごを見たいと思おもいました。しかし、そんな手てづるはどこにもありません。考かんがえたすえに、彼かれは酒さけを買いかにいったら、あるいは見みえまいものでもないと思おもつたのでした。

あわれな平三へいぞうは、夜よの目めも眠ねむらずに、わらをあんで、雪ゆきぐつをつくりました。そして、翌よくじつ日は、それを持もつて、村むらから村むらへ、売うつて歩あるきました。

晩方ばんがた、家うちに帰かえると、小ちいさな徳利とくりをさげて、町まちの酒屋さかやへ酒さけを買いか

いに出かけたのです。

彼は、毎日毎日、晩方になると、徳利をさげて、酒を買

いにゆきました。しかし、三国一の花嫁は、家の奥深くはい

つていとみえて、一度も、その顔を見ることができなかつた。

いつも、頭のはげあがった番頭が、上目を使つて、じろりと平

三の顔をにらむように見て、一合ますに酒をはかつていれて渡

しました。彼は、毎日毎日失望して、家へ帰つてきたので

あります。

「あほうの平三は、いつから、あんなに飲み助になりおつたか

。」といつて、村の人たちは、彼が、ちらちらと雪の降る中を町

の方へ徳利をさげてゆく、さびしそうな姿を見送つたのでした。

平三は、あまり、酒が好きでなかったから、飲み残しを、大きな徳利にうつしておきました。そして、だんだんそれがたまって、酒は大きな徳利いっぱいになろうとしました。

ある日、彼は、今日こそ美しい嫁御を見たいものだと思つて、酒を買いにゆきました。やはり見られなかつたばかりでなく、番頭から、冷淡にされて、悲しんで家へ帰ると、徳利の酒を茶わんにうつして、かなしみを忘れようとして飲みほしました。いつになく、量をすごして酔つてしまうと、彼はごろりと横になつて、眠つてしまったのです。

この村にいても、おもしろくないので、平三もいよいよ旅へ出かけたのでした。こわれかかつたような、小さな汽車に乗つて、

野原のほらの中なかを走はしっています。石いしくれがごろごろとして、短みじい草くさが風かぜになびき、向むこうの方ほうには、さびしい丘おかがつづいていました。そのさきは、海うみになつてゐるらしく、しろい雲くもが、ちぎれて飛とんでいます。

ピョーと、汽笛きてきが高たかくひびいて、汽車きしやがとまると、彼かれはおりなければならなかつた。

「ここは、どこだろう……。」

彼かれは、足あしの向むくままに歩あるいてゆくと、

「どこへいくんだい。」と、ふいに声こゑをかけた子こども供どもがあつた。ふり向むくと、あの死しんだ坊ぼうやでありました。

「おお、坊ぼうや。おまえは、こんなところにきているのか、母かあさん

が、泣ないていたぞ。そして、おまえは、死しんだのではなかったのか。」

「まだ、たくさんあちらにいるよ。つれていってやろう。」

子供こどもは、先さきにたつて、平三へいぞうを丘おかの上うえへ案内あんないしました。いつ

しか、子供こどもの姿すがたは見みえなくなつて、彼かれは、赤いガラスでつくられ

た宮殿きゆうでんの前まえに立たつていました。頭あたまのとがった、三角形かくけいの赤

いガラスの建物たてものは傾斜けいしゃした丘おかの上うえにあつて、かたむいていま

した。そして、この建物たてものには、ふしぎに入り口ぐちがついていませ

んでした。赤いガラスをとおして、内部ないぶをのぞくと、いくつつか、

影かげが動うごいています。じつと見みるとおじいさんが、腰こしかけていまし

た。また、いつか、旅たびへ出でかけた若わかもの夫婦ふうふがいました。女にようぼ

房は、にこにことして、なにか盆ぼんにのせて、あちらへ運はこんでいました。こちらには、びつこの娘むすめが、さびしそうにして立たつています。そればかりでない、犬いぬも、子馬こうまも、みんないっしょにむつまじく暮くらしていました。おじいさんは、なにかいっついているとみえて、口くちだけは動うごいていたが、ガラスの内部ないぶでいっついているので、声こえがすこしも聞きこえてきませんでした。平三へいぞうは、なんだか、そのおじいさんも、娘むすめも、みんなどこかで、一度見ど見たことのあるような気がして、考かんがえていました。が、それらは、すべて、自分じぶんの持もっていたおもちやであつたことに気きがつかかなかつたのです。

「もし、もし、おれも、仲間なかまにいれてくんなされ。もし、もし。」と、平三へいぞうは、叫さけんだけれど、あらしが強つよくて、その声こえを吹ふき消け

したのでした。

青々あおあおとすみわたった空そらの下したで、すさまじいあらしが、吹ふいて

いました。たちまち、どつと、おそつて、この赤あかいガラスの宮きゆう

殿でんにぶつつかつたかと思おもうと、さながら氷こおりをくだいたようなひ

びきをたて、みごとな建たてもの物は、さんらんとして、空くう中ちゆうに、

飛とび散ちつてしまいました。

夢ゆめからさめた平へい三ぞうは、ぼんやりとして、外そとをながめました。

めずらしく、よく空そらは晴はれて、夕ゆう焼やけが赤あか々と雪ゆきの平野へいやをそめ

ていました。そして、なにかいいことのある知しらせのように、か

らすが鳴ないていました。

「こんどこそ、魂たましいをいれかえて働はたらくだ。」

かれは、生まれ変わったように、さとりました。たまたま遠い、
浜はまの方ほうへ帰かえつてゆく、からのそりがありました。浜はまへゆけば、冬ふゆ
でも仕事しごとがあると聞きいていました。彼はかれ大きな徳利とくりの酒さけを男おとこにや
つて、浜はまの方ほうまで、そのそりに乗のせてもらうことにしました。彼かれ
は、永えい久きゆうに、その村むらから去さったのです。からすだけが、彼かれと
の別わかれを惜おしんで鳴ないていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「未明童話集4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「赤い鳥」

1929（昭和4）年1月

※表題は底本では、「赤《あか》いガラスの宮殿《きゆうでん》」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：七草

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤いガラスの宮殿

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>